2019年6月17日(月) 日本海新聞

日々往来

福永 憲高

日の本や 金も子をうむ 御代の春

江戸時代後期の俳人・小林一茶は、花鳥風月だけでなく生活に密着した句も数多く詠んでいる。そのなかに「日(ひ)の本や金(かね)も子をうむ 御代(みよ)の春」という句がある。借金でもしていたのだろう、利息が増えて金も人と同じように結構な子(利子)を生むんだなあと皮肉っぽく詠んだ句だと、私は解釈している。

このように解釈すると、この句は今日わが国が直面する問題を見事に浮き上がらせている。ここ目の本で、子どもの数が減りだして久しいが、金も子(利子)を生まなくなってきている。少子化・超低金利の現代、一茶ならどんな句を詠むだろうかと思う。

先日、2018年の二つの統計が発表になった。数字は1・42と1・0。ともに2には届いていない。前者は出生率(合計特殊出生率。1人の女性が一生に産む子どもの数)、後者は消費者物価指数(CPI、前年比)である。

政府では、子どもを欲しいと考える夫婦らの希望がすべてかなった場合の出生率(希望出生率)を1・8にする目標を掲げて各種の施策を実施している。日本銀行では、消費者物価が前年比で2%上昇することを「物価安定の目標」と定め、これをできるだけ早く実現するために現在の金融政策を行っている。

出生率と物価、あるいは人口と経済は密接に関係している。一般的には、景気が良くなり経済が成長すれば物価は上がる。そこで、「人口が減る中で経済は成長できるか」という問いが出てくる。

直観的には、働く人、消費する人が減る中で経済成長は難しいようにも思える。これから人口がどんどん減っていくという悲観的な見通しが強まれば、新たな投資も手控えられて経済成長は難しくなるかもしれない。しかし、過去、わが国では生産性の向上などで人口増加率を大きく上回る経済成長率を実現していた時期もあり、必ずしも悲観的になる必要はない。

そのためにもいろいろとやるべきことはある。「2が遠いCPIと出生率」などとつまらない句を詠んでいる暇はない。

(日本銀行鳥取事務所長)